イラスト：SHIGEUO－MASAI

佐々木マキの問題提起

百合さわる（東京）

明るい太陽の下で、未来に向かって走ることに汗を流せない者は、暗いコンクリートの部屋の中で、膝をかかえて涙を流さねばならない。

ドンキホーテかハムレットか。人はその人生に於て、いくたびかその撰択を迫られる。

佐々木マキの「天国で見る夢」には、その二典型が交互に現われている

前者は、ランニングシャツで大地を蹴っている黒い男であり、後者は、淋しげな顔をしてナイフを持っている長髪の青年である。

一見無関係な様々のパターンの中で、繰り返しあらわれる幾つかのモチーフがあるが、この二人はそうしたモチーフの中で最も重要なテーマであると思われる。

ランニングの男の目は、永遠の地平を見つめている。行かねばならないのだ。理由なんかない。足に付けられた鉄の球がその悲劇性を象徴する。しかし、作者は決して彼に同情的ではない。むしろ嘲笑的でさえある。ちょうちんあんこうは男の後で、この悲劇と喜劇の同質性を笑っているのである。

走ることの出来ない青年は、ナイフを持ってうづくまる。青年は全面的に悲劇を押し売りする。しかし、青年の目がたたえているものは悲しみだけではない。それは怒りでもある。愚かな者たちへの憎しみである。だが青年はそれに対して全く無力である自分を知っている。完全なる絶望。青年の持つナイフは、やがて自分自身を刺すことになるだろう。そしてその屍の上には、一輪のシニカルな花が咲くだろう。青年もその事を予感し始めている。

ユメかトラか。愚鈍なドンキホーテと憂欝なハムレット。いづれにせよ世界は滅亡するしかない。マキの作品全体を通じて流れるデカダニズムの響きは、未来に対する絶望である。奇妙な形の飛行機は、繰り返し、落ちるしかない。二十世紀の没落である。

しかし、マキの作品が、いかに警鐘的意味を持ったところで、あのバラバラなコマの連続する数頁を、果して漫画と云い得るかという疑問が起こる。

いや、ならば漫画とは一体何か。

私はここで漫画の定義を論じるつもりは毛頭ない。ただ〝月刊漫画〟を称する「ガロ」にマキの作品が載った事の意味を考えたいのである。

「天国で見る夢」は既成概念としての「漫画」に様々な問題提起を示している。その一つに、この作品の〝沈黙性〟をあげることが出来よう。全編を通じてこの作品にはネームがない。いや、ふき出しはあるにはあるが、それは絵であり、意味のない音である。作者は、完全に言語を拒絶し、言葉以前の処で我々の胸に迫ろうとする。この冒険は貴重なものである。漫画はやはり漫画なのであって、文学ではあり得ない。殊に〝画〟と称するからには、〝映像文化〟としての誇りを持ちたいものである。

もう一つ忘れてならないのは、この悲劇的没落の作品の中で、独りその滅亡を笑っている一つ目小僧の存在である。ドンキホーテとハムレットの谷間をみごとに超越したところで、没落してゆく世界を笑うことのできる自信。これこそがこの作品の唯一の救いであり、作者の自己投影なのである。

創り出した作品の中に展開する世界を、冷ややかに超越している自分を保ち得たという事が、佐々木マキ独特の作家性であり、この作品の魅力の集約である。私は「ガロ」の紹介したそういう新人の中で、佐々木マキのこの作品を、今でも忘れる事か出来ずにいる。

白土三平を支持する

ト沢光男（埼玉・15歳）

最近、「ガロ」の読者サロンにおいて、一様に白土・水木両氏への非難が上がり、新人やその他の先生方の作品に注目される人が増えてきた。まず、私の意見を申し上げると、私の考えはそれらとはまったく逆である。私が考えるに、おそらく昔は（今も少しは）「ガロ」は、白土氏中心以外なにものでもなかったでしょう。

昭和39年9月創刊号は、ただ白土作品だけの収録でした。その時までに（私は当時12歳）私が知っていた白土作品は、「風の石丸」と「サスケ」だけで、あとは「くぐつ」「幻の犬」等の短篇です。その時の先生への印象は、ただ〝忍者のみを描く短篇作者〟でした。

しかし「ガロ」を（忍者マンガに興味をもっていましたので）買ってから半年、「カムイ伝」の第一回を見ました。そしてこの時、はじめて非人なる者の存在を知り、また、氏によってそれまでファンだった横山光輝「影丸」への心がしだいに動きました。

父母は教員ですので、私のマンガに対する心を正すため、たびたびマンガ本を火の中に放り込みました。それから一年、二、三冊の短篇とのみ考えていた「カムイ伝」は十回を数えてまだ終っていませんでした。その時私は、氏を世界一の大家と思いました。大きくなるにつれ、新しい内容理解ができ、第一回後記を覚えました。

さて、身の上話はさておき、最近の白土氏への悪口は頭にくるものがきわめて多い。みな私より年上ゆえ、大きいこともいえませんが、年が同じく、力も同じなら〝ぶっとばして〟やった

ことでしょう。なぜ白土氏への悪口がはやるのかはわかりました。そこにおいて私と逆なのです。まずその悪口のタンカをきって、「なぜカムイは生きている、弟が死んだんでありまして、いいかつまた同じ名でございました、いいかげんにしろ」、直訳すればこのようなものが昭和40年後半の代表でした。

私なりの答は、弟で双児という一番親しい人の死で、カムイはその方法をあらためたのだと知りました。決して歪みを表わすためにカムイが死んだのではないのです。続いて昨年7月号で深沢光有という何となく私に似ている名の人が、良くも悪くもいっています。しかし共産主義については「カムイ」伝③を読んで下さい。そこにはまったく逆のことがかかれてあります。また、11月号では、ゼブラマンガ研究会か、カムイ伝の人々はいつになっても解放されない、といっています。しかし、解放されたらそれこそそのマンガはウソで、その時に私ははっきりこの本を買うのを中止いたします。歴史を見て下さい。百姓や非人が江戸時代に解放されましたか。

そして、大賛成なのが12月号の日本醤油協会従業員の方々の発言です。次に川野氏に申し上げます。あなたが日本一「ガロ」を愛する読者ならば、私は世界一「カムイ伝」を愛する読者です。

本年2月号の松野氏はあまりにもヒドイ。松野様、あなたにいっておきます。「カムイ伝」は他のいっさいの作品、特に「忍者武芸帳」の延長ではありません。

白土氏の作品は今まで下手だった。絵も下手だった。あなたのいうのは、残酷さと主人公が型にはまっているということでしょうが、クソリアリズムとは何事か！　主人公とは、四人いや三人と一匹（竜之進、カムイ、正助、<狼>）のことでしょうが、彼らは超人ではありません。また、自由にも動いておりません、いや動けないのです。

「忍者武芸帳」の主人公はなんでした。自分の意志ではたらく忍者と浪人でした。その違いをわきまえていただきたい。下手なゆえに描いた残酷と、上手くなった残酷を比べて下さい。

川越様、私は個人の意見を尊重し、自分からはいえないのでこの三年の間黙っていました。しかし、いいます。

「新人作家のものはくだらない」、おこられるのを覚悟でいいます。それは、ひとつはどこか白土氏の考えの延長、もうひとつは、わからせようとして描いていない、わかるのは勝又進氏のみです。

今のままだと私は「カムイ伝」終了とともに「ガロ」から縁を切ることでしょう。また、愛好家ならみなそうするでしょう。

中野裕子氏への疑問

石原　正人（千葉）

小川晃氏の「大空と雑草の詩」がだめだったのは、確かに中野氏のいうように（3月号読者サロン）「作者の現実認識の甘さと乏しさ」に原因があるようです。だけれども、それが大衆社会状況とか、確固としたロマンチシズムの不在とか、人間性の崩壊とか、あなたが並べた現実を認識していなかったからだというのは、私にはおかしいと思われます。

「大空と雑草の詩」のもつ〝ヒューマニティ〟そのものの弱さ、作者の思想的な弱さが、実はあの作品をだめにしたのだと思います。「大空……」には、現実を自らの思想の力によって再構成しようとする視点がなかった。むしろ〝弱者の味方〟的な発想で、弱者を守ろうとした感じがします。それが証拠には、いやに善人が多すぎたではありませんか。あの作品が錯綜する人間の思想や性格を人間の中に描出することができなかったのは、作者の〝ヒューマニティ〟の弱さである、といったのはこの意味でです。「大空……」のヒーローやヒロインには「悪」がない。それは作者の中の「観念上の悪」にすぎなかったのです。

私は、大衆社会状況云々ということで、「ストリーがない」＝難解だ、つまりおもしろくない、ということを擁護できないと思います。「漫画＝おもしろい絵、劇画＝ストーリーのある絵」などという概念は、私にはどうでもいいのです。要するに、つまらないのが多いのです。それは、表現方法と作者の思想の分裂に原因があると思います。この場合、方法とは、作品の構成やテーマの発展のさせ方などを意味します。

つげ義春氏の作品に「ストーリー」がないかといえば、そういうわけでもなくて、彼の作品は私にはわかりますおもしろいなあ、と思わせます。日常性の外の世界を垣間見せてくれるからです。しかも日常性のすぐわきにあるそれをです。そこで、私は思考させられるのです。

ですが、たとえば、つりたくにこ氏の作品は、私にいわせれば、できあがった思想のバリエーションあるいは一種のモダニズムにすぎません。そこに何かを新しく考えさせるものはなんにもないのです。そして新人諸氏の作品に不満が集まるのも、実はそういうことだと思います。アイデアだけがあって、作者のいない作品が多すぎるのです。

つまり、カオスがあるのではなく混乱がある。あなたのいう複雑な状況に対応して想像力の世界を切り開いていく作家主体ではなくて、それにひきずられている作家が多い、ということが私のいいたいことです。私は、やはり最近の「ガロ」は、そんな意味で（何人かの作家を除いて）つまらないと思っています。「ガロ」は、おもしろくなるべきです。なにせ、「ガロ」なのですから。

●編集部から

「読者サロン」へのご投稿は千二百字以内でお願いします。掲載分には薄謝を進呈します。